養　豚　回　顧

【県職時代の思い出を中心に】

神　原　　啓（岡山県職ＯＢ）

昭和３７年に岡山県に奉職し、退職後は社団法人岡山県畜産会・畜産協会に再雇用され１３年、この半世紀を浅学非才な私をよくぞここまで支えてくださったものと改めて感謝の念を抱かされます。現在も畜産協会でお世話になりながら、これまでのご恩を畜産とは無関係ではありますが、在住町内でボランティア活動をすることにより、お返しできればと頑張っているところです。

さて、私の職跡を振り返ってみますと、印象に残っているのは養豚関係の仕事であったような気がします。

昭和４２年津山家畜保健衛生所へ異動、農林省の「豚疾病講習」を受講したのをきっかけに養豚担当となってからです。

昭和３６年に三木知事の英断により、スウェーデンからランドレース種を導入、３７年に指定種豚場が設置され、普及に力を入れていたとはいえ、当時は中ヨークシャー種が大勢を占めていましたが、次第にランドレースを中心に大ヨークシャー種との１代交雑種豚となり、留め雄にハンプシャー種を用いる３元交配豚生産が主流となり、時代とともに留め雄がデュロック種へと変遷を遂げ、現在に至っております。

また昭和５０年頃と記憶していますが、長野知事のきもいりで鹿児島県からバークシャー種が導入され、後に英国からも原種豚導入が行われ、県の振興施策により、おかやま黒豚生産も軌道に乗ってまいりました。

一方、衛生面では昭和４２年頃の防疫活動といえば、県南部を中心に猛威をふるっていた豚コレラ防疫一色、クリスタルヴァイオレット不活化ワクチンで手を紫色に染めながら予防接種に奔走していました。

その後、農林省家畜衛生試験場で開発された、「豚コレラ生ワクチン」の普及で、劇的に豚コレラの発生が激減（現在は豚コレラ清浄国）するとともに、養豚経営の多頭化が進展し、全国的に慢性伝染性疾病である豚委縮性鼻炎、豚流行性肺炎（マイコプラズマ肺炎）等の呼吸器病が蔓延し、養豚に大きな経済的被害を与えるようになりました。

◎慢性伝染性疾患清浄化対策

原種豚供給センター機能を担っていた岡山県酪農試験場でも豚委縮性鼻炎が発生、浄化対策として、当時の森谷養豚部長の決断によりＳＰＦ豚（特定疾病不在豚）（注１）へ全面的に変換されましたが、当時はまだＳＰＦ豚の供給体制は弱体であったことから、自然分娩による慢性疾病清浄化試験が主要課題として取り上げられ、鋭意研究に取り組んでおられました。私も昭和４７年酪農試験場への異動、当該試験に取り組み、技術確立に努めました。

しかし、自然分娩という条件下で子豚を取り上げるため、徹夜で分娩監視する苦労や、初乳を与えない子豚のほ育の難しさには随分と悩まされました。

その後、農林省畜産試験場で開発された自動ほ育機導入により子豚育成率は格段に上がり、母豚以上の成績を上げられるようになり、ホルモン剤応用による昼間への分娩誘起等で技術確立に至り、清浄豚（岡山方式）（注２）の作出に拍車がかかりました。

そのような中で、昭和４９年、岡山県経済農業協同組合連合会で清浄豚による種豚増殖センターが開設されるとともに、県内５～６か所に清浄豚農場が誕生しましたが、養豚場の徹底した衛

生管理の煩わしさや豚の成長が早いため、厚脂になりやすく、豚の改良、肥育技術開発の遅れ等が課題となり、残念ながら養豚経営者の理解も乏しく次第に衰退してきました。

しかし、平成７年に社会問題となった出血性大腸菌症(0-157)、１３年の発生に端を発した牛海綿状脳症(BSE)等から、消費者の食の安全・安心意識が高まり、豚の伝染性病を保有せず、育成率や飼料効率が良く、経済効果を高めるために養豚産業に応用されたＳＰＦ豚が安全食肉として注目されるようになってきました。

当初の目的とは観点が多少異なってきた感もありますが、安全な食肉を供給することは、畜産経営者のみならず、関係者の責務であることを踏まえても、健康な肉畜の生産が不可欠であり、岡山県の清浄豚生産への取り組みは意義のあるものであったと自負しております。

◎終わりに

私が養豚にかかわった頃、岡山県では昭和４２年には、養豚農家戸数3,000戸・飼養頭数50,000頭、その後、飼養戸数は次第に減少したものの、
当時の備中町湯野、美星町や奈義町等の養豚団地の隆盛もあり、飼養頭数は昭和５５年には84,000 頭とピークとなり、以後、戸数の激減するなか、飼養頭数も次第に減少し、県を退職した平成１１年には 70 戸 35,000 頭、その後、戸数は 30 戸弱まで減少したものの現在も頭数は40,000 頭台で推移しており、ＳＰＦ豚の多頭飼養経営や地域内一貫経営に取組むところ、黒豚生産に意欲のある経営者などが中心となり堅実な養豚が営まれ、「ピーチポークとんトン豚」「おかやま黒豚」等のブランド化も推進され、養豚にかかわった私としても頼もしさを感じているところです。

(注 1) ＳＰＦ豚(特定疾病不在豚)：帝王切開等で子豚を無菌的に取出し育成した豚を基に繁殖したもので、養豚経営に大きな損失を与える豚委縮性鼻炎、豚流行性肺炎(豚マイコプラズマ肺炎)、豚赤痢及び人畜共通伝染性原虫病であるトキソプラズマ病に感染していない豚のことを指し、決して無菌豚ではありません。

(注 2) 清浄豚：衛生的に自然分娩により子豚を取上げ、ＳＰＦ化し育成した豚を基に繁殖したもので、ＳＰＦ豚の定義に該当しないため清浄豚と称したものです。

バークシャー種

おかやま黒豚肉